

# 唐代女性詩人李冶論

——その人物像について——

横 田 むつみ

## 一. はじめに

六朝期に編纂された『文選』の作者一三五名のうち、女性作者は前漢の班婕妤と後漢の班昭だけである。程なくして編まれた『玉臺新詠』には艶詩が多く所収されているため、女性詩人は『文選』よりは多いが、それでも一三〇名に対して一二名約九パーセントに過ぎない。唐代になると近体詩が成立し、詩の最盛期を迎え多くの詩人が輩出した。その唐代の詩をすべて集めた『全唐詩』でも、作者二九五五名のうち女性は一三二名で全体の五パーセントにも満たない。このような中国文学における女性作者の割合を、例えば『万葉集』の歌人との比較でみると、『万葉集』は凡そ四人に一人が女性歌人<sup>(3)</sup>であり、その相違は著しい。

『文選』や『玉臺新詠』に作者として名が挙がっている数少ない女性たちは、后妃や公主と、著名な文人の妻・妹・孫等の親族であり、その殆どは宮廷内の限られた女性である。唐代に至っても初唐期まではこのような宮廷の女性が中心で

あったが、安史の乱を境にして、中晩唐期には妓女や薛濤や女道士の魚玄機といった宮廷外の女性詩人が登場してくる。その先駆けとなったのが、盛唐末から中唐初期にかけて活躍した女道士の李冶である。それまでの女性たちは男性に詩の代作をして貰ったり、男性から一方的に詩を贈られる場合が殆どであったが、李冶は自ら詩作し、男性詩人と詩の応酬をする機会を得て、宮廷外の女性詩人としての存在が認識されるようになる。

李冶については残存詩が一六首<sup>(4)</sup>（一説には一九首）と少ない上に、その人物像や詩の解釈についての纏まった文献は現在なく、明らかにされていない点が多い。そこで本論では伝記や詩集の小伝等の関係文献を年代別・内容別に整理分析して、より確かな李冶の人物像と、人物や詩の評価の時代による変遷について考察していきたい。

## 二、「宮廷外女性詩人の先駆け」李冶の登場

中国においては早くも『詩経』に、誕生する子どもが男子か女子かによって扱いが違ふことが詠まれており<sup>(5)</sup>、すでに男性優位の様相を呈している。更には礼教という枠組みの中で「三従四徳」<sup>(6)</sup>をあるべき姿として、女性は男性に隷属する者として生きることが強いられてきた。従って宮廷の一部の女性を例外とした多くの女性にとっては、詩や文学の世界は無縁のものであった。このように連綿と続く男性中心の社会で、しかも女性が詩文に目を向けることの少なかつた時代において、女道士である李冶が宮廷外の女性詩人の先駆けとなり得たのは、唐代という時代の特性と、李冶自身の優れた詩才が大きな要因となったと考える。

唐代は北朝の尚武の遺風を受け継ぎ、女性にも自由闊達な気風が生まれて活気に満ち溢れていた。その上、世界の冠たる大唐帝国として空前の繁栄をみて、北方異民族や西域の文化も流入し、開放的でおおらかな時代となり、女性たちは生き生きと活動した。このような社会の気風と女性の地位は則天武后という女帝を誕生させ、女帝もまたこの時代の気風を

推し進め助長した。<sup>(7)</sup>

また唐代においては、老子（李耳）と同じ李姓である自らを老子の子孫とした皇帝の擁護のもとに、道教が最も隆盛を極めた。道教は女仙が始祖として存在していたことや、教義も女性的なものへの寛容さを持ち女性に優位な地位を与えるものであったため、特に女道士は持て囃されて自由気儘に振舞うことが出来た。<sup>(8)</sup>そして女道士は道観において詩人である士大夫たちと出会い、詩の応酬をする機会に巡り合えたのである。

唐代の自由な気風と道教の隆盛という時代を背景に、女道士李冶が現れた時、李冶は単に詩が詠める女道士というだけではなく、後に「女性の中の詩豪」と言われたほど詩才豊かであったため、男性詩人と並ぶ女性の詩人として認められたのである。それまでは女性詩人といえば宮廷内の女性に限られていたものが、漸く安史の乱以後、宮廷外の女性も士大夫たちと詩の応酬をするようになる。その先駆けとなったのが、女道士李冶である。

### 三、李冶の生涯

まず本名と字について考察する。これに関する記述の詳細は、末尾に示す表Iの通り<sup>(10)</sup>である。字には、「季蘭」と「秀蘭」という記述があるが、「季蘭」が正しいと考える。嘗て存在していたと記録されている「李季蘭集」<sup>(11)</sup>という別集の名称からも「季蘭」という字は間違いない。「秀蘭」という表記は宋代に編纂された『太平廣記』にあるだけで、他の文献には一切見られない。「秀蘭」の「秀」は「季」の誤写であろう。

本名については、『才調集』には「李治」、『宋史』藝文志には「李裕」、『唐才子傳』と『全唐詩錄』には「李治」とあり、『唐音統籤』と『全唐詩』小伝には「李治一作裕」とある。このように本名には「李治」「李治」「李裕」の三つの記述があるが、「李治」が正しいと考える。元来本名と字というものは、相互に関係を有するようにつけるものであるが、「治」「裕」

と「蘭」とはその意味において齟齬があり、「冶」と「蘭」とは密接な関係にあるからである。因って「冶」は「冶」の誤写であると考ええる。この論拠はほぼ陳文華説に從うものである。<sup>(13)</sup>

次に女道士（女冠）であったということに関しては、表Ⅰのように主な関係文献のすべてに女道士（女冠）とある上に、李冶自身が詠んだ「道意崔侍郎に寄す」という詩の内容からも、李冶は女道士（女冠）であったと断定出来る。

原籍に関しては、『唐才子傳』の「峽中（峽州、現在の湖北省宜昌府）の人」と、『全唐詩』小伝の「吳興（浙江省烏程県）の人」という記述があるが、「吳興の人」が正しいと考える。李冶伝や李冶詩に詠まれている地名や人物との関連を考察しての見解である。その論拠の詳細については紙幅の関係上、別稿で論ずることとする。

生没年に関しては諸説があり確定していない。聞一多は「七〇九〜七八〇?年」<sup>(14)</sup>として、没年には疑問符を付記している。生年に関してはこれ以外には触れていないものはない。没年に関しては、傅璇琮は「按ずるに朱泚の亂平ぎ、徳宗興元年（七八四）七月に長安に回る。……則ち季蘭の卒するは當に是の年七、八月の間に在るべし」<sup>(15)</sup>として、興元元年を没年としている。従って生年については聞一多説を採って七〇九年とし、没年については傅璇琮説を採って興元元年（七八四年）とすると、生存年は七〇九年から七八四年ということになる。

しかし聞一多説にはその論拠は示されておらず、傅璇琮説はその信憑性について疑問がある『奉天録』に基づいての見解と考えられるので、これを鵜呑みにすることは出来ない。そこで生存年を七〇九年から七八四年と仮定して、『中興閒氣集』や『唐才子傳』、それに李冶詩「恩命追ひ入り、廣陵の故人に留別す」等に記されている生没年と関連する事項を一つ一つ突き合わせて考察していくと、生存年は七〇九年から七八四年であるという可能性が出てくるが、断定出来るまでには至らない。

#### 四、李治の人物像

表Iに挙げた李治に関する十八文献には、李治伝のみ書録、李治詩のみ書録、李治伝と李治詩の両方を書録しているものがある。これらの十八文献に記載されている事項のうち、前述の本名・字・女道士・原籍についてと、別集の有無に関する事項を除いた部分のすべてを分類すると、次に挙げるA～Iの九種の条が幾つか順不同に組み合わせられて記されていることが分かる（詳細については表Iを参照）。そこで次にこのA～Iをその内容に拠って、「人物や詩の評価」A・B・E、「逸話」C・D・G、「人となり」F、「人生における出来事」H・Iの四つに分類して考察することで、そこから浮かび上がる李治の人物像を探ってみたい。

まず、「人物や詩の評価」に関しては、次の三種の条が挙げられる。

〔A〕士有百行、女唯四徳。季蘭則不然。形氣既雄、詩意亦蕩。自鮑昭以下、罕有其倫。

士には百行有るも、女には唯だ四徳のみ。季蘭則ち然らざるなり。形氣既に雄、詩意も亦た蕩。鮑昭自り以下、其の倫あること罕なり。

『中興閒氣集』『唐詩紀事』『唐才子傳』『唐詩品彙』『唐音統籤』『名媛詩歸』『全唐詩録』に同文の条がある。

〔B〕如遠水浮仙棹、寒星伴使車、蓋五言之佳境也。上倣班姬則不足、下比韓英則有餘。不以遲暮、亦一俊嫗。

「遠水仙棹を浮かべ、寒星使車を伴ふ」の如きは、蓋し五言の佳境なり。上班姬に倣えば則ち足らざるも、下韓英に比ぶれば則ち餘り有り。遲暮を以てせざるも、亦た一俊嫗なり。

『中興閒氣集』『太平廣記』『唐詩紀事』『唐才子傳』『唐音統籤』『名媛詩歸』『全唐詩録』に同文の条がある。

㉔女中之詩豪也。

女中の詩豪なり。

『太平廣記』『唐詩紀事』『唐音統籤』『名媛詩歸』『全唐詩錄』に同文がある。

㉕、㉖の条が初めて見えるのは、唐代の『中興閒氣集』である。『中興閒氣集』は高仲武が編纂した詩の選集で、「中興閒氣」とは「中興の時代における優れた詩人」という意味であり、代宗朝の詩人二十六人の詩とその詩人評が記述されている。李冶については詩人評に続いて「校書七兄に寄す」を始め六首が採録されている。

㉕では、高仲武は李冶という人物と李冶詩について、女性の四徳はどれも李冶には無縁であり、見かけも心持ちも男のようである上に、詩意は奔放で、六朝宋の鮑昭の妹である鮑令暉より以降このような人は滅多にいないと評している。『中興閒氣集』は特に儒教的色彩の濃い選集だったよう<sup>(17)</sup>で、女道士である李冶に対する評価は厳しい。

「鮑昭自り以下」の「鮑昭」とは六朝宋の詩人「鮑照」のことであるが、詩情の蕩に関して李冶との比較対象としては考えにくい。詩の内容から見ると、やはり鮑照というより妹の鮑令暉の方が適当<sup>(18)</sup>である。聞一多も指摘するように、鮑昭の下に妹の字が欠けていると考える。

㉖では、次に挙げる李冶詩「校書七兄に寄す」の頸聯「遠水仙棹を浮かべ 寒星使車を伴ふ」を「五言の佳境」と称賛し、「遠くは後漢の班姬には及ばないが、近くは南斉の韓英よりは優れている」と評している。「班姬」とは前漢の班婕妤のことであり、『太平廣記』『唐才子傳』『名媛詩歸』にも『中興閒氣集』と同様に「班姬」と記されているが、『唐詩紀事』『唐音統籤』『全唐詩錄』には「班姬」ではなく「班婕妤」と明記されている。「韓英」とは南斉の韓蘭英のことで、宋の考武帝の時に「中興賦」を献じ、賞せられて宮中に入ったとされる文辞に優れた婦人である。

寄校書七兄

校書七兄に寄す

無事烏程縣

事無し 烏程縣

蹉跎歲月餘

蹉跎 歲月餘す

不知芸閣吏

知らず 芸閣の吏

寂寞竟何如

寂寞 竟に何如

遠水浮仙棹

遠水 仙棹を浮かべ

寒星伴使車

寒星 使車に伴ふ

因過大雷岸

大雷岸を過ぎるに因りて

莫忘幾行書

幾行書を忘ること莫かれ

李冶とほぼ同時代の高仲武は、女だてらに詩を詠みその詩といえは奔放で、そんな人は滅多にいない、と李冶が当時の社会通念から逸脱していた点については苦々しく批判しながらも、それに続けて「校書七兄に寄す」の頸聯「遠水仙棹を浮かべ、寒星使車を伴ふ」を「五言の佳境」と称賛している。この頸聯の二句については、明代に編纂された『詩藪』でも「孟浩然能く過ぐる事莫し<sup>(19)</sup>」と、また同じく明代の『唐音癸籤』でも『大曆の正音なり<sup>(20)</sup>』と表現を変えて絶賛されている。

また『太平廣記』には、回のように「女中の詩豪」とある。『太平廣記』のこの部分には「玉堂閒話に出ず」と出所文献が付記されているので、『玉堂閒話』の編纂された五代または『太平廣記』の編纂された宋代において、李冶は女性の中では詩才が抜きん出た存在であると認識されていたことが分かる。また「女中之詩豪」の上に「劉長卿謂」が付加えられて「劉長卿謂ふ季蘭女中の詩豪為りと」となったのは『唐詩紀事』からである。それ以降に編まれた『唐音統籤』『名媛詩

歸』『全唐詩錄』は、すべてこれを襲って劉長卿の見解として伝えている。<sup>(21)</sup>従って李冶が「女中の詩豪」と称されたことは確かであるが、劉長卿がそれを称したという点が確かかどうかは不明である。

李冶の「逸話」を伝えるものとして、次の三種の条が挙げられる。

〔C〕嘗與諸賢集烏程縣開元寺。知河間劉長卿有陰重之疾、乃誚之曰、山氣日夕佳。劉長卿對曰、衆鳥欣有託。舉坐大笑。論者兩美之。

嘗て諸賢と烏程縣の開元寺に集ふ。河間の劉長卿陰重の疾有るを知り、乃ち之を誚して曰く、「山氣日夕に佳し」と。劉長卿對へて曰く、「衆鳥託する有るを欣ぶ」と。坐を舉げて大ひに笑ふ。論者兩つながら之を美するなり。

『中興閒氣集附校文』『太平廣記』『唐才子傳』『唐音統籤』『名媛詩歸』に同文の条がある。

〔D〕初五六歲時、其父抱於庭、作詩詠薔薇。其末句云、經時未架却、心緒亂縱橫。父恚曰、此女子將來富有文章、然必為失行婦人矣。竟如其言。

初め五、六歳の時、其の父庭に抱き、詩を作り薔薇を詠ず。其の末句に云ふ「時を経るも未だ架却せず 心緒亂れて縦横たり」と。父恚りて曰く、「此の女子將來文章を富有せん 然れども必ずや行を失するの婦人と為らん」と。竟に其の言の如し。

『玉堂閒話』『太平廣記』『唐詩紀事』『唐才子傳』『唐音統籤』『名媛詩歸』『全唐詩錄』に同文の条がある。

〔G〕時往來剡中、與山人陸羽、上人皎然、意甚相得。皎然嘗有詩云、天女來相試、將花欲染衣。禪心竟不起、還捧舊華歸。其謔浪至此。

時に剡中に往來し、山人陸羽・上人皎然と、意甚だ相ひ得たり。皎然嘗て詩有りて云ふ「天女來りて相試み、花を



將て衣を染めんと欲す。禪心竟に起こらず 還た舊華を捧げて歸る」と。其の謔浪此に至る。

『唐才子傳』『唐音統籤』に同文の条がある。

㊦は、李冶が五、六歳の時「時を経るも未だ架却せず、心緒亂れて縦横たり」と詠んだ詩の一節から、父が「この娘は将来豊かな文才を發揮するだろうが、人の道を踏み外すような女になりそうだ」と言ったが、とうとうその通りになったという逸話である。

このような幼少期の逸話は全く同じような形で、薛濤についての文献にも見られる。『薛濤傳』に「濤八、九歳にして、聲律を知る。其の父一日庭中に坐し、梧を指し之を示して曰く、『庭除の一古桐、聳幹雲中に入る』と。濤をして之に續かむ。即ち聲に應じて曰く、『枝は迎ふ南北の鳥、葉は送る往來の風』と。父愀然たること之を久しくす<sup>(22)</sup>とある。やはり八、九歳の頃に庭で父親と詩を詠んだ際、薛濤が詠んだ詩の一節は、将来妓女になることを予感させるようなものであったため、父親は薛濤の将来を思い遣ったという。この二つは全く同じパターンで書かれていることから、それが妓女や女道士の誕生譚に用意された定型化された逸話の書き方だったことを推測させる。

㊦と㊧は成人してからの逸話である。㊦は烏程縣の開元寺に諸賢が集まった折、劉長卿と陰疾を話題に陶淵明の詩を引用して、山氣と疝氣(下の病氣)とを掛けて詩を詠んで戯れ合ったとしている。劉長卿については、『新唐書』に「睦州司馬に除せられ<sup>(23)</sup>とあることから、睦州(浙江省建德縣)司馬の時代に李冶と接点があったと考えられる。李冶と劉長卿とが応酬した詩は残されていないが、このような逸話だけは残っている。李冶と劉長卿の遠慮のないやり取りから二人は互角に付き合っていたことが窺える。劉長卿といえば、錢起・郎士元・李嘉祐と共に詩名を馳せて「錢郎劉李」と並称された詩人である。このように諸賢が集まった烏程縣の開元寺に、女流詩人である李冶が同席していたという意味は大きい。

李冶は男性詩人に伍して詩を詠むことができ、その存在がこの頃認識され始めたのであろう。

〔G〕の皎然の詩「天女來りて相試み、花を將て衣を染めんと欲す。禪心竟に起こらず、還た舊華を捧げて歸る」は、『全唐詩』卷八二二に「李季蘭に答ふ」という詩題で採録されている。李冶が剡中を行き来し陸羽や皎然と意気投合して、詩の応酬をした際に詠んだものと考えられる。皎然は六朝の詩人謝靈運の子孫といわれるが、安祿山の乱が起こるや戦乱を避けて湖州に帰り、興國寺・觚溪・杼山の妙喜寺を生活の本拠として、陸鴻漸・顔真卿・韋應物・李洪・李萼等と交流して詩の応酬をしている。その中でも皎然は湖州の文学グループの指導的人物として次第に名声と評価を高くしていった。<sup>(24)</sup> 李冶はこのような湖州の文学グループの詩人とも交遊があり、詩の応酬をしていたのである。

李冶には、この逸話に登場するもう一人、陸羽（字は鴻漸）を詠んだ次の詩がある。

湖上臥病喜陸鴻漸至 湖上にて病に臥し陸鴻漸の至るを喜ぶ

昔去繁霜月 昔去るは 繁霜の月

今來苦霧時 今來たるは 苦霧の時

相逢仍臥病 相逢ふも 仍ほ病に臥し

欲語淚先垂 語らんと欲するも 淚先づ垂る

強勸陶家酒 強ひて勸む 陶家の酒

還吟謝客詩 還た吟ず 謝客の詩

偶然成一醉 偶然 一醉を成さば

此外更何之 此外 更に何くにか之かん

李冶はこの頃すでに年老い、その上病気がちでもあったようだ。太湖辺りのひっそりとした佇まいで長く病床にあった

時、同じ茗溪に隱棲していた陸鴻漸が時折見舞ったのであろう。その頃陸鴻漸は、「茗溪マツの涓に廬を結び、関を閉ざして書を読み非類と雑らず。名僧・高士と談讌すること永日たり」という生活(25)をしていた。李冶はその鴻漸が久し振りに訪ねて来てくれたことを喜び、二人して陶淵明がこよなく愛したお酒を飲み、謝靈運の詠んだ詩を吟じて心を解きほぐし、再会の束の間を過ぎた時に詠んだものである。

このように李冶は劉長卿や皎然や陸羽らと、女道士と道観に通う文人という関係で親密な交際をして詩の応酬をして、詩作に關しても少なからず彼らから影響を受けていたことが推察される。

これらの逸話のうち「劉長卿と陰疾を話題にして詩を詠んだ」や、「皎然と戯れ合うようなきわどい詩のやり取りをした」といった表現からは、社会通念から逸脱して詩を詠み、娼優に近かったと言われるほど自由奔放だった女道士である李冶を蔑むような編者の心の内が窺える。これは女性に対する当時の思潮や、李冶に対する編者の認識を反映するものと言えよう。

李冶の「人と成り」に触れているのは、次の条だけである。

〔F〕美姿容、神情蕭散。専心翰墨、善弹琴。尤工格律。

姿容美しく、神情蕭散たり。翰墨に専心し、弹琴を善くす。尤も格律に工みなり。

これは、元代に編纂された『唐才子傳』に記述があるだけである。

『唐才子傳』は正史類を始め、自伝・別伝・行状・碑誌・別集序や『唐詩紀事』『郡齋讀書志』『直齋書錄解題』等数多くの資料を基に編纂されているが、李冶についてこの部分の叙述資料となったものは不明である。<sup>(26)</sup>

因みに『唐才子傳』には同じ女性詩人である魚玄機や薛濤についても同様の記述がある。魚玄機については「性聰慧にして、讀書を好む。尤も韻調に工みにして、情致繁縟たり<sup>(27)</sup>」とし、薛濤については「性辨惠にして、翰墨を調ふ<sup>(28)</sup>」としている。これらは李冶・魚玄機・薛濤が生存していた時代から数百年も経過した宋人の著述であって、本人を實際に目にしてのものではない。従って例えば李冶詩「相思の怨」という詩の中で「琴を攜へて高樓に上るに 樓虚しく月華滿つ 相思の曲を彈著して 弦腸一時に斷つ」と詠んでいることから、李冶については「彈琴を善くす」のではないかと憶測されているように、どれも詩の内容や詠み振り等から推測しての常套句的な表現と考える。

最後に挙げる「人生における出来事」に関しては、次の二種の条がある。

田天寶間、玄宗聞其詩才、詔赴闕、留宮中月餘、優賜甚厚、遣歸故山。

天寶の間、玄宗其の詩才を聞き、詔して闕に赴かしむ、宮中に留まること月餘、優賜甚だ厚くして、故山に歸らしむ。

これも先に述べた田と同様に、元代に編まれた『唐才子傳』に記述があるだけである。

一 時 有 風 情 女 子 李 季 蘭 上 泚 詩。言 多 悖 逆、故 闕 而 不 錄。皇 帝 再 剋 京 師、召 季 蘭 而 責 之 曰、汝 何 不 學 嚴 巨 川。有 詩 云、手 持 禮 器 空 垂 淚、心 憶 明 君 不 敢 言。遂 令 撲 殺 之。

時に風情女子李季蘭泚に上る詩有り。言に悖逆多し、故に闕きて録さず。皇帝再び京師を剋し、季蘭を召して之を責めて曰く、「汝何ぞ嚴巨川を學ばずや。詩有りて云ふ『手に禮器を持つも空しく涙を垂らす 心に明君を憶へば敢へて言はず』」と。遂に之を撲殺せしむ。

これは唐代に著された『奉天錄』に記述があるだけである。

Ⅲの「天寶年間に李治の詩才を知った玄宗が宮中に召して一ヶ月余り留めさせ、沢山の賞物を与えて故郷に帰した」という記述の「召されて宮中に入った」ということは、次に挙げる李治詩「恩命追ひ入り廣陵の故人に留別す」がこの裏付けとなっている。

恩命追入留別廣陵故人 恩命追ひ入り廣陵の故人に留別す

無才多病分龍鐘 無才 多病にして 龍鐘を分とし

不料虚名達九重 料らずも 虚名 九重に達す

仰愧彈冠上華髮 仰ぎて愧づ 冠を彈き 華髮に上すを

多慚拂鏡理衰容 多に慚じて 鏡を拂い 衰容を理す

馳心北闕随芳草 心を北闕に馳せ 芳草に随ひ

極目南山望舊峯 目を南山に極め 舊峯を望む

桂樹不能留野客 桂樹 野客を留むる能はず

沙鷗出浦謾相逢 沙鷗 浦を出れば 謾りに相逢ふ

<sup>(30)</sup>この詩は詠みぶりから李治の詩ではないという説もあるが、李治が召されて宮中に入った時期等については、先学の諸研究もあり再考の余地があるものの、召されて宮中に入ったという点は肯定出来ると考える。

Ⅳは、唐代に著された『奉天錄』<sup>(31)</sup>卷一のたった二行にこのような記述があるだけで、正史や関連文献には一切見られない。朱泚とは幽州昌平の人で、『舊唐書』<sup>(32)</sup>『新唐書』<sup>(33)</sup>に列伝がある代宗朝の盧龍の武将である。唐朝は安史の乱の際に反対勢力を打倒できずに、天雄・盧龍・成徳・昭義等の反乱側の部将を華北地方に節度使としての地位を与えて降伏させた。

その後彼らに対して唐朝が抑圧に乗り出すと、連合して建中四年（七八三年）に反乱を起こし、この際盧龍節度使の兄で長安にいた朱泚を擁立して長安を占拠した。そのため徳宗は一時長安西方の奉天（陝西省乾県）に逃れて、翌年まで一年近い流浪を余儀なくされた。これが朱泚の乱である。李冶はこの朱泚に、皇帝に叛く内容の詩を贈ったため、時の皇帝徳宗の命令によって撲殺されたと『奉天録』には書かれている。

この『奉天録』四巻は、建中四年（七八三年）十月に反乱軍が長安を占拠したために徳宗が奉天に蒙塵してから、翌興元元年（七八四年）七月に反乱が鎮圧されて徳宗が長安に帰還するまでのことを記した書物で、他の史伝と合致しない記事もあるが、この間の事情を詳細に記述しているため貴重な資料となる。撰者の趙元一についても不明であるが、この乱を目撃した徳宗朝（七七九〜八〇四年）の人ではないかと推測<sup>34</sup>されている。

『奉天録』にあるこの一件を裏付ける文献はないので、李冶が贈ったとされる詩の内容や贈った時期等についても知る手がかりは全くない。しかし『奉天録』は長安占拠から徳宗の長安帰還まで、実際にこの乱の一部始終を近くで見た人の目で克明に記されていることから、李冶は乱の首謀者である朱泚と何らかの関わりがあり、徳宗に叛くような内容の詩を朱泚に贈った事が発覚して、罪を受けて撲殺されたということはあながち否定出来ない。

因みに聞一多は李冶の生没年を「七〇九〜七八〇?年<sup>35</sup>」とし、没年としている七八〇年は朱泚の乱の七八三年より前であることから、李冶の最期を朱泚の乱と関係付けてはいない。一方、傅璇琮は「按ずるに朱泚の亂平ぎ、徳宗興元元年（七八四）七月に長安に回る。……則ち李季蘭の卒するは當に是の年七、八月の間に在るべし<sup>36</sup>」として、李冶の最期を朱泚の乱と関係付けていることから、『奉天録』を参考にした可能性は高い。このように李冶の最期が謎を残していることは、李冶への興味を益々掻き立てて止まないものとしている。

表 I

☆：奉勅撰

■：初出を示す

	李 冶 伝 等 書 録 の 文 献	詩のみ書録の文献	
唐	① 中興閒氣集 (卷下) (四部叢刊本) ■ ■ ■	◇ 奉天録 (卷1) ■	② 又玄集 (卷下)
五代	◇ 玉堂閒話 ■?	③ 才調集 (卷10) 「女道士李冶、字季蘭」	
宋	④ 太平廣記 (卷273)☆ ■ ■ ■ + ■? ⑤ 唐詩紀事 (卷78) ■ ■ ■ ■	※ ④左記以外 「李秀蘭以女子有才名」  ⑥ 直齋書錄解題(卷19) 「李季蘭集一卷。唐女冠。與劉長卿同時。相譏調之語、見中興閒氣集」	⑦ 窗雜吟錄 (卷30)  ⑧ 文苑英華 (卷256、274)  ⑨ 樂府詩集(卷60)
元	⑩ 唐才子傳 (卷2) ■ ■ ■ ■ + ■ ■ ■	※ ⑩左記以外 「季蘭名冶、以字行。峽中人、女道士也。……………有集、今傳於世」 ⑪ 宋史藝文志 (卷208)☆ 「李季蘭詩集一卷。唐女道士李裕撰」	
明	⑫ 唐詩品彙 ■ (卷23、37、70) ⑬ 唐音統籤 (卷922) ■ ■ ■ ■ ■ ■ ⑭ 名媛詩歸 (卷11) ■ ■ ■ ■ ■	※ ⑬左記以外 「女道士李冶一作裕、字季蘭、集一卷 <small>唐志無</small> <small>宋志有</small> 」	
清	⑮ 全唐詩錄 (卷99) ■ ■ ■ ■	※ ⑮左記以外 「冶字季蘭、女道士也」 ⑯ 全唐詩 (卷805)☆ 「李冶一作裕、字季蘭、女冠也。吳興人。存詩十六首」	

## 五 終わりに

李冶は、安祿山の戦乱を避けて呉興（浙江省烏程県）辺りに隠居したり、赴任して来た士大夫である詩人たちと親しく交際し、なかには詩の応酬をした詩人もいる。それは陸羽、朱放、崔渙、閻伯均等のことを詠んだ李冶詩が残されていることから分かる。その他李冶伝により交流があったと考えられる詩人は、中唐初期の詩人を代表する劉長卿や、湖州の文学グループの指導的立場にあった皎然等である。李冶はこのような錚々たる男性詩人たちと詩の応酬をして、詩作に關しても少なからず影響を受けている。

残存詩一六首の中には「五言の佳境」と称賛された詩もあり、詩才を認められて宮中に入ったという説もある。後には李冶詩の真価が認められて「女性の中の詩豪」と言われ、宮廷外の女性詩人の先駆けとなり、「李冶」の名を文学史上に残した。

唐という時代の持つ自由な気風と道教の隆盛という絶好の条件の下に登場し、男性詩人と伍しての活躍が見られる李冶であったが、やはりまだ社会の風当たりは時として強かった。社会通念から逸脱して詩を詠んでいる女性であり、更には娼優のようだと言われるほど自由奔放だった女道士李冶を蔑むような書きぶりの逸話からもそれは窺える。これは女性詩人であり女道士でもあった李冶に対する、当時の思潮や士大夫たちの認識を反映している。

李冶詩には、女性詩人特有の女らしくきめ細やかな表現のものに加えて、男性が詠んだような論理的な詠み振りのものや躍動感に満ちた力強いもの、ひとりの人間として、また一道士としての李冶の真摯な生き方が窺えるものもある。李冶詩からは、李冶伝の逸話とはまた異なる人物像を窺い知ることが出来る。この点に関しては後日改めて論じたい。

魚玄機は嫉妬により侍女を殺して刑場の露と消えたという。中国文学史上、名を残した女性にはなぜか伝説めいた挿話



が多い。李治も時の皇帝徳宗に叛く詩を謀反人朱泚に贈ったという罪で撲殺された、という衝撃的な最期を迎えたとされているが、女道士李冶が中国における宮廷外の女性詩人の先駆けとして残した大きな足跡は、このことによって決して消えるものではない。

〔注〕

- (1) 西村富美子「中国女性文学に関する研究」(『文部省科学研究補助金研究成果報告書』平成二一年)
- (2) 平岡武夫 市川亨吉『唐代の詩人』(京都大学人文科学研究所 一九六〇年)
- (3) 星野五彦『万葉女性とその時代』(おうふう 平成六年)
- (4) 李冶詩集は現在存在していない。『全唐詩』には、卷八〇五「李冶」小伝に「存詩一六首」とあり、詩一六首に断句が加えられている。更に卷八八八にも「薔薇花」と「柳」の二首が李冶詩として採録されている。しかし卷八〇五の断句と、卷八八八の「薔薇花」と「柳」の二首は李冶詩とは断定できないので、李冶の残存詩は一六首と考える。
- (5) 『詩経』小雅「斯干」に、「乃生男子 載寢之牀 載衣之裳 載弄之璋 其泣喤喤 朱芾斯皇 室家君王 乃生女子 載寢之地 載衣之裼 載弄之瓦 無非無儀 唯酒食是議 無父母詒罹」とある。
- (6) 三従とは『儀禮』「喪服傳」でいう女性が従うべき三つの道、すなわち家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うことで、四徳とは『禮記』「昏義」でいう婦人が修養・実行すべき四つの徳目、すなわち婦徳(貞順)・婦言(言葉遣い)、婦容(身だしなみ)・婦功(家事)のことである。
- (7) 高世瑜著 小林一美・任明訳『大唐帝国の女性たち』(岩波書店 一九九九年)
- (8) カトリリーヌ・デスプ『女のタオイスム―中国女性道教史―』(人文書院 一九九六年)
- (9) 『太平廣記』『唐詩紀事』『唐音統籤』『名媛詩歸』『全唐詩錄』に、「女中之詩豪」という記述がある。
- (10) 表Iに使用した文献は次の通りである。  
『中興閒氣集』：唐・高仲武撰(『唐人選唐詩(十種)』北京・中華書局出版 一九五八年 所収)  
『又玄集』：唐・韋莊撰(『唐人選唐詩(十種)』北京・中華書局出版 一九五八年 所収)  
『才調集』：五代蜀・韋穀撰(『唐人選唐詩(十種)』北京・中華書局出版 一九五八年 所収)

- 『吟窗雜錄』：宋・陳應行編『吟窗雜錄』（北京・中華書局出版 一九九七年）
- 『唐詩紀事』：宋・計有功撰（四部叢刊初編）台北・台灣商務印書館 一九七五年 所収）
- 『文苑英華』：宋・彭叔夏撰『文苑英華』（台北・華聯出版社 中華民國五十四年）
- 『樂府詩集』：宋・郭茂倩輯『樂府詩集』（台北・台灣中華書局出版 一九六六年）
- 『唐詩品彙』：明・高棅編選『唐詩品彙』（上海・上海古籍出版社 一九八二年）
- 『唐音統籤』：明・胡震亨編『唐音統籤』（上海・上海古籍出版社 二〇〇三年）
- 『名媛詩歸』：明・鍾惺點次『名媛詩歸』（出版地不明 出版者不明 明末期 東洋文庫所蔵）
- 『全唐詩錄』：清・徐倬編著『全唐詩錄』（台北・宏業書局 一九七六年）
- 『全唐詩』：清・彭定求他編『全唐詩』（北京・中華書局出版 一九六〇年）
- 『中興閒氣集附校文』：清・何焯撰（四部叢刊初編）104 台北・台灣商務印書館 一九七五年 所収）
- 『太平廣記』：宋・李昉等編『太平廣記』（北京・人民文學出版社 一九五九年）
- 『唐才子傳』：元・辛文房撰『唐才子傳』（叢書集成初編）608 北京・中華書局出版 一九九一年 所収）
- 『奉天錄』：唐・趙元一撰『奉天錄』（叢書集成初編）『奉天錄及其他三種』名埠・商務印書館 民國二六年 所収）
- 『直齋書錄解題』：宋・陳振孫撰『直齋書錄解題』（國學基本叢書）3 台北・台灣商務印書館 民國五七年 所収）
- (11) 『直齋書錄解題』卷一九と『宋史』藝文志卷二〇八に、「李季蘭集一卷」とある。
- (12) 「治」には「なまめかしい。見目麗しい」、「蘭」には「菊科・蘭科の香草の名。花が美しく、香気がある」という意味があるの  
で、「治」と「蘭」とは、その意味において密接な関係にあるが、「治」は「平和のさま。安定したさま」、「裕」は「物が豊かな  
さま。ゆとりがあるさま」という意味であるので、「治」「裕」と「蘭」とはその意味において齟齬がある。
- (13) 『唐女詩人集三種』（上海・上海古籍出版社 一九八四年）前言
- (14) 『聞一多全集』（武漢・湖北人民出版社 一九九三年）第七卷 唐詩編中「唐詩大系」
- (15) 傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（北京・中華書局出版 一九八七年）卷二 李季蘭
- (16) 『中興閒氣集』（十種本）では「形氣既雌」としているが、『中興閒氣集附校文』の「雌作雄」に拠り「雄」とした。
- (17) 中沢希男「中興閒氣集考」（『群馬大学紀要』人文科学編 通号11 一九六二年）

(18) 『聞一多全集』第八卷、唐詩編下「全唐詩人小伝」に、「《中兴间气集》下：士有百行，女唯四德，季兰则不然。形气既雄，诗意亦荡，自鲍昭（以下疑脱妹字）以下，罕有其伦」とある。

(19) 胡應麟撰『詩藪』（北京・中華書局出版 一九五八年）内編卷四

(20) 〔注〕の(10)『唐音統籤』卷八「癸籤」

(21) 『太平廣記』には「女中之詩豪也」とあるが、『唐詩紀事』には「劉長卿謂季蘭爲女中詩豪」、「唐音統籤」には「劉長卿曰季蘭爲女中詩豪不可多得」、「名媛詩歸」には「長卿曰季蘭爲女中詩豪也」、「全唐詩錄」には「劉長卿謂季蘭爲女中詩豪」とある。

(22) 李瓊撰『薛濤傳』（明・秦淮寓客編『綠牕女史』卷二 所収）

(23) 『新唐書』藝文志 卷六〇

(24) 賈晉華『皎然年譜』（廈門大學出版社 一九九二年）

(25) 陸鴻漸『陸文學自傳』（『文苑英華』卷七九三 所収）

(26) 布日潮風 中村喬『唐才子傳之研究』（汲古書院 一九七二年）

(27) 『唐才子傳』卷八

(28) 『唐才子傳』卷六

(29) 『四庫全書總目提要』集部 總集類「薛濤李冶詩集二卷」には、「冶集僅詩十四首、然其中恩命追入留別唐陵故人一首、詳其詞意不類冶作、殆好事者欲哀冶詩、與濤相配病其太少、姑摭他詩足之也」とある。

(30) 余嘉錫『四庫提要辨證』、陳文華校注『唐女詩人集三種』、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』、聞一多『聞一多全集』第八卷 唐詩編下「全唐詩人小伝」等に、李冶が宮中に入った時期に関する見解が述べられている。

(31) 〔注〕の(10)『奉天錄』

(32) 『舊唐書』卷二〇〇下

(33) 『新唐書』卷二二五中

(34) 神田信夫 山根幸夫『中国史籍解題辞典』（燎原書店 一九八九年） 三〇七頁

(35) 〔注〕の(14)

(36) 〔注〕の(15)